

老年看護学実習における学生の痴呆性高齢者の理解プロセス

著者	松田 千登勢, 長畑 多代
引用	大阪府立看護大学紀要. 2004, 10(1), p.43-50
URL	http://doi.org/10.24729/00010791

原 著

老年看護学実習における学生の痴呆性高齢者の理解プロセス

松田千登勢・長畑 多代

The Process of Student's Understanding Elderly With Dementia by Gerontological Nursing Practice

Chitose MATSUDA, Tayo NAGAHATA

Abstract This report describes the results of a qualitative study which explored the process of understanding by students in a three-week session of gerontological nursing practice. Data were collected using semi-structured interviews with eight third-year students of Osaka Prefecture College of Nursing.

The results indicated six categories in the process of understanding of the elderly with dementia as follows: 1) Mental preparation for care; 2) Rejection, 3) Being at a loss how to cope with the behavior of dementia, and 4) Groping for ways to deal with the behavior of dementia (appearing in Week 1); 5) Getting a feel for ways to cope (appearing in Week 2); 6) Understanding of care effectiveness (appearing in Week 3). Category 4, Groping for ways to deal with the behavior of dementia, was clarified as a turning point towards which educational guidance and support are of great importance.

Key word: The process of understanding, Gerontological nursing practice, The elderly with dementia

I. はじめに

高齢化に伴い介護老人保健施設（以下老健と略す）の入所者が痴呆症をもつ割合は増加しており、老健で実施する本学の老年看護学実習においても、受けもち高齢者が痴呆症である割合は年々増加傾向にある。筆者らは、老健で働く看護師が痴呆性高齢者への日々の対応で少なからず困難を感じており¹⁾、痴呆性高齢者に対するとらえ方からケア姿勢が形成されていることを明らかにした²⁾。痴呆性高齢者と日々関わっている看護師と比べ、実習で初めて痴呆性高齢者と関わる学生の場合、様々な困惑や困難を経験するであろうと容易に推察できる。先行研究においても、実習で痴呆性高齢者を受けもつ学生は、本人から得たい情報が得られず、言動の意味も理解できないなど当惑することが多く、

対応に困難を感じている状況が明らかになっている³⁾。

老年看護学教育においては、高齢者に対する学生のとらえ方が重要視され、講義や演習および実習による高齢者イメージの変化に関する研究が数多くなされ、実習を経験することによって高齢者のイメージが変化したという報告がされている⁴⁻⁶⁾。しかし、高齢者を総合的に理解するということは、単にイメージが変化することをいうのではなく、実習における実践を通して、自らが感じ、考えたことと講義・演習で学んだ知識との統合により、学生なり的高齢者観を広げ、深めることであると考え。

そこで、実習目標でもある高齢者の総合的理解を達成するために、学生がどのような困難を経験し、それをどのように乗り越え、痴呆性高齢者をどう理解したのか、その過程を詳細に明

らかにする必要があると考えた。本研究の目的は、学生が実習を通して痴呆性高齢者をどのように、どう理解していったのか、実習の流れに添って学生の理解プロセスを明らかにすることである。

II. 研究方法

1. 対象

対象者は2年次に老年看護学概論，老年看護学方法論の講義を受けた後，3年次前期に老健での老年看護学実習（3週間）を行った学生の中で，中等度～重度の痴呆性高齢者を受けもち，研究者らに実習指導を受けた学生8名である（実習期間：平成14年5月～7月）。

2. 面接調査の方法および内容

3年次前期の実習がすべて終了し，講義に支障を来さない2月～3月に，プライバシーが確保できる場所で面接調査を行った。面接方法は半構成質問紙による面接調査であり，事前に実習記録を読みかえして，老年看護学実習の状況を思い出してもらいながら，3週間の実習の流れにそって経験したこととその時感じたこと・考えたことを語ってもらった。その面接内容は対象者の同意を得て録音し，逐語録を作成した。

3. データ分析

データとして，逐語録，実習中の記録，実習での学びのレポートを活用した。まずこれらのデータを繰り返し読み，実習の流れに添って受けもち高齢者へどのような関わりをし，その時どう感じ，考えたのかという点に着目し，痴呆性高齢者との実習中の関わりにおける学生の認識を抽出した。研究者2名で対象ごとに，学生の感じたこと，考えたことについて意味を解釈しながら，実習の流れに添って整理した。そして，各対象の比較検討を行い，カテゴリー・サブカテゴリーに分類し，ネーミングを行った。

4. 倫理的配慮

研究目的を説明した上で研究協力の有無により教育の評価に影響がないこと，受けもち高齢者と学生のプライバシー保護を確約すること，

研究協力は自由意志であること，研究途中で中止してもかまわないことを説明し，本人の同意を得た。

5. 操作的定義

広辞苑で理解とは「人の気持ちや立場がよくわかること」と述べられている。本研究では，ただ言葉を介して理解する認識だけでなく，直感や洞察も含めた事象全体の理解と定義する。

6. 老年看護学実習の概要

本学の老年看護学実習（3単位）は，大阪府下の老健4カ所において，3年前期に成人看護学実習とともに展開している。エンパワーメントを基盤とした高齢者の総合的理解を第一の目標に1名の高齢者を受けもち，1週ごとの実習のねらいを学生に伝えている。すなわち1週目は受け持ち高齢者の日課にあわせて行動をとるにしながら生活リズムを知り，高齢者の全体像を理解する，2週目は受けもち高齢者とともに目標を決め，看護過程に添った実践を行う，3週目は看護過程の実践および評価を行うことである。そして，3週目の木・金曜日に学内で，実習中の看護を振りかえり，学生が実践から得たテーマを中心として，受けもち事例の看護について考察することで，行った看護の意味づけを行い，高齢者理解を深め，その内容を実習での学びとしてレポート提出させている。

III. 結果

1. 受けもち高齢者の特性

研究参加者である学生が受けもった高齢者の年齢は71歳～97歳，性別は男性3名，女性5名，痴呆自立度がⅡb～Ⅲb，生活自立度A1～B2であった。学生が困難と感じた状況として，ネガティブな言動，周囲への無関心，ケアの拒否，収集癖による他者とのトラブル，夕暮れ症候群，うつ傾向等がみられた。加えて難聴や言語障害等もみられ，コミュニケーションを図ることが困難なケースが多かった（表1）。

2. 実習中の痴呆性高齢者の理解

実習中の理解プロセスは図に示すとおりであ

表1 受け持ち高齢者の概要

年齢	性別	生活自立度	痴呆自立度	要介護度	学生が困難と感じた状況	
1	75	F	A1	Ⅲa	2	強度の認知障害, 収集癖, 他者とのトラブル
2	88	F	A2	Ⅲb	3	ネガティブな言動
3	83	M	A2	Ⅲa	2	ほとんど発語なし, 立ち上り, 難聴
4	88	F	A2	Ⅲa	3	突然の気分変動, 暴言, やや難聴
5	97	F	B2	Ⅱb	3	不穏(手たたき行動) 周囲への無関心
6	89	F	B1	Ⅱb	認定中	夕暮れ症候群, 難聴・視力障害
7	91	M	B2	Ⅲb	3	昼夜逆転・ケアの拒否
8	87	F	B2	Ⅲa	5	うつ, 言語障害・軽度難聴

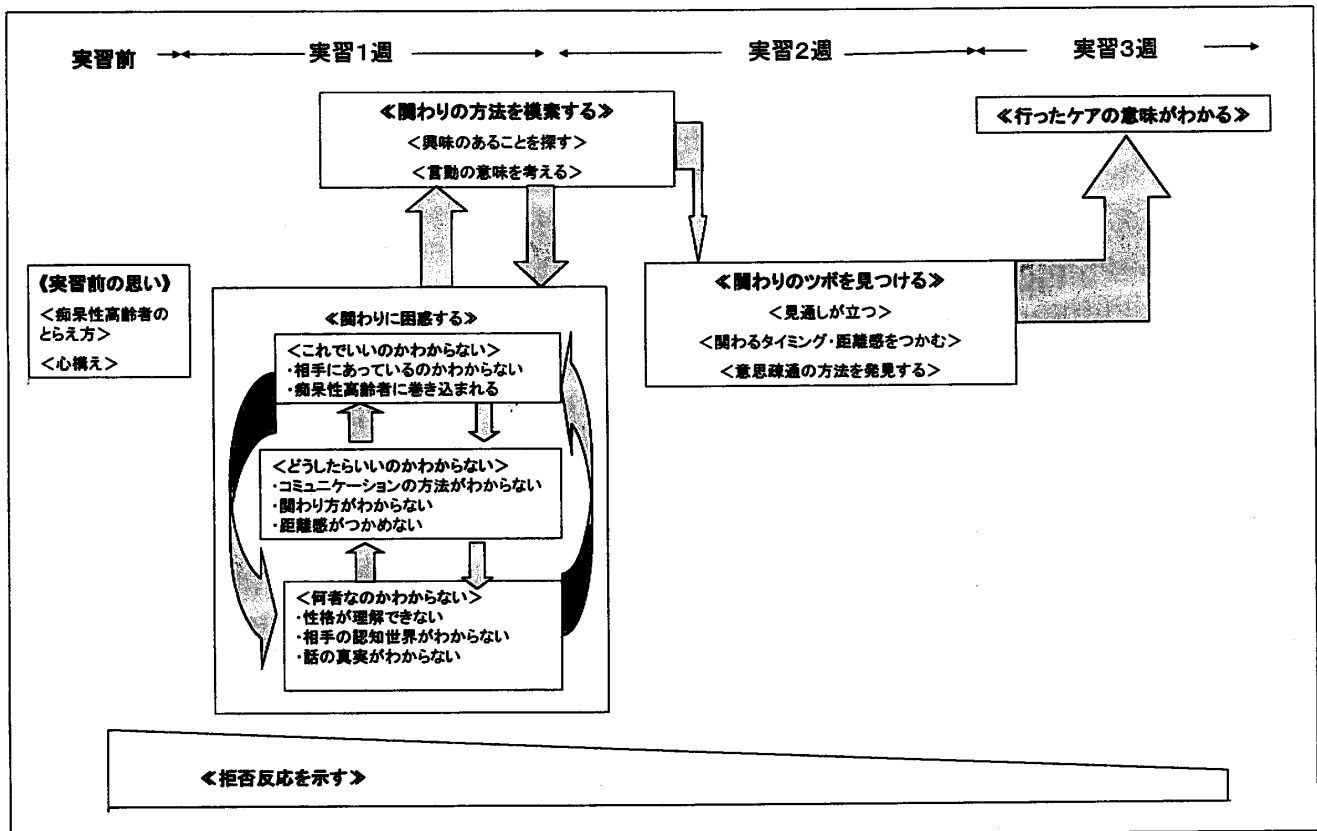


図1 学生の痴呆性高齢者の理解プロセス

り、文中の《》はカテゴリー、<>はサブカテゴリー、「」は学生の語った内容を示す(図1)。学生の痴呆性高齢者理解のプロセスは、《実習前の思い》《拒否反応を示す》《関わり方に困惑する》《関わり方の方法を模索する》《関わり方のツボを見つける》《行ったケアの意味がわかる》の6つのカテゴリーに分類された。

1) 《実習前の思い》

これは学内オリエンテーションで痴呆性高齢者を受け持つことが決定してから、実際に関わるまでの学生の思いであり、<痴呆性高齢者のとらえ方><心構え>の2つのサブカテゴリーがあった。

<痴呆性高齢者のとらえ方>は、一般的なイ

メージから痴呆性高齢者を身近に感じられないなど、実習に入る前の段階における学生のとらえ方であった。

「一般的に疎外されているイメージがあって、そういう人と接したこともなくて想像がつかない段階で、痴呆があるという情報だけあったから、痴呆っていったら壁を作ることがあった。」

〈心構え〉は、どのように関わっていいかわからず不安を抱いたり、講義の内容から興味をもって臨んでいたり、痴呆であることに先入観を持たず特別に構えないなど、実習で痴呆性高齢者を受けもつ上で、学生の心の準備を示すものであった。

「何をしゃべったらいいやろうっていうのと、痴呆の人にあまり接したことがなかったからというのが痴呆なのかなって、本でしか知識がなかったの、実際にどんな人なのか不安に思ってたのが大きかったです。」

「そんなに“うわ”とか“いや”というのじゃなくて、勉強とかで痴呆の症状とかは聞いたことあったけど、実際どういう感じかなっていう興味があった。そんなに痴呆を持ってない人と比べてどうこうというのはなかったです」

2) 〈拒否反応を示す〉

これは実習1週目から終了するまでみられていた。会話をしようと試みても全く成立せず、暴言を浴びたり予測できない気分の変動に遭遇することに対して、「もういや！」と否定的な感情を持つものであった。

「絶対もういやって、明日も行かなあかんと思ったらしんどかった。最初の週かな、なんか機嫌が悪くて話しかけても“ほっといて”ってなった時“もういやや”と思ったんです。」

「1週目は痴呆のことも余りわかってなかったから拒否されると“いややなあ”って思うだけだったけど、2週目になると相手に余計に関わったらそこでいやなことを引きずってしまうって先生に教えてもらったんで“今はそっとしておかないと不快な気持ちになるな”って…イヤっていうのは少しなくなってきた。でも、その気持ちが完全に消えたかっていわれると解決していなかったと思う」

3) 〈関わりに困惑する〉

これは実習1週目に見られ、痴呆性高齢者の

病態や症状について学習していても、実際にどう関わっていいのかわからず困惑しているものであった。サブカテゴリーとして、〈何者なのかかわからない〉〈どうしたらいいのかわからない〉〈これでいいのかわからない〉の3つがあった。

〈何者なのかかわからない〉は、痴呆性高齢者の認知世界が理解できないことから、相手の話している内容の真偽もわからず、情報も少ない中で、相手が一体全体どんな人なのかかわからないことへの困惑であった。

「入所されているのに“今家から帰ってきた”とか“昨日バイクに久しぶりに乗った”とか…ありえないな—と思って。いろいろ話するにつれて、“あれ”と思うことは増えていきました。理解するのが難しいなあって」

〈どうしたらいいのかわからない〉は、認知障害があるためにどのようなコミュニケーションをとったらいいかわからず、また痴呆性高齢者といつ、どのくらいの距離感を持って関わればいいかわからず困惑するものであった。

「(違う人の部屋に入ろうとしてトラブルを避けようと思い)言ってもわからない人に自分がどういうふうな距離をとって、どういう所で関わっていったらいいかわからなくて焦ってばかり…」

〈これでいいのかわからない〉は自分の関わりが、痴呆性高齢者にあっているのかどうかかわからない、また痴呆性高齢者のネガティブな言動に巻き込まれて二人でパニックになり、どうすればいいかわからず困惑しているものであった。

「(相手のつらい過去の話)どこまで受け止めたらいいかわからなくなって、どんどん相手の世界に引き込まれて…、相手もパニックになるし、私もパニックになる。二人でごっちゃになって“あーっ!”っていう感じ。」

4) 〈関わり方を模索する〉

これは実習1週目後半から2週目にかけてみられ、〈関わりに困惑する〉段階を経て、学生なりに関わるきっかけやヒントを探り、関わり方を模索しようとするものであった。サブカテゴリーとして、〈興味のあることを探

す><言動の意味を考える>の2つがあった。

<興味のあることを探す>は一緒に折り紙を折ったり、散歩に行くなど、行動を共にすることで相手の反応を見ながら、痴呆性高齢者の興味や好きなことを探し、それを関わりの手がかりにしようとするものであった。

「興味を持っていることは積極的じゃないけど楽しんでやってくれているのが見てわかったし、実際にお手玉とか一緒にできて、そのときはすごい楽しそうやったし、否定的な言葉もあったことはあったけど、“昔はこうした”って楽しい風にとらえていたし、それをきっかけにして他の高齢者さんとも自分から話しかけたりしてた」

<言動の意味を考える>は一見奇異に見える痴呆性高齢者の言動に対して、相手の立場でその意味や理由を考え、探ろうとするものであった。

「(いつも同じところに座っている高齢者に対して) 何で座っているんだろうと思い、一緒にいて周りを見たり、しゃべったりしようと思って隣に座ってみた。座らされているんじゃないかと、自分から座っているんだからきっと何か意味があるんだろうと思って…」

5) <関わり方のツボを見つける>

これは実習2週目頃からみられ、<関わる方法を模索する>ことを通して、受けもち高齢者へどのように関わればよいか、学生なりの方法を見いだしたものであった。サブカテゴリーとして、<見通しが立つ><関わるタイミング・距離感をつかむ><意思疎通の方法を発見する>の3つがあった。

<見通しが立つ>は、これまでの試行錯誤の関わりを通して、受けもち高齢者のパターンを見いだすことで先の予測ができ、次にどう関わればよいか判断できるようになることであった。

「(夕暮れ症候群に対して関わるうちに) 時間とか静けさでだんだん落ちついてくる。毎日その繰り返しがあつた、パターン化するのはいけないかもしれないけど、自分の中で“こういう感じになるかな”と先の展開がよめて、これで大丈夫かなって思えるようになった」

<関わるタイミング・距離感をつかむ>は痴

呆性高齢者の言動から本人の意図をくみ取り、徘徊などの症状や他者とのトラブルが起きる状況を察知し、タイミングよく関わったり、状況に応じて直接関わるのではなく距離をおいて見守ることができることであった。

「ここまでいったら危ないというのが大体見えてきたんで、そこに行くまでは車椅子を押してはるので大丈夫だっていう距離感みたいなのがつかめたのかな。途中でやめても結果は同じなんでぎりぎり待って声かけをしたらというかたちで」

<意思疎通の方法を発見する>は、声かけの工夫など相手にあったコミュニケーション方法がわかり、痴呆性高齢者と意思疎通がはかれる方法が発見することであった。

「作業レクの時、最初はみんなで作ってるのを見てても触ろうともしなくて、“やってみませんか？”って言ってもやらなかったんですけど、“ここもってもらえますか？”とか”ここちょっとテープで止めてくれませんか”というように、全部じゃなくて少しずつ言ったらだんだん手を出してくれるようになって、そのうち向こうから“なにしてるの？”とか話しかけてくれるようになって、こちらが“そろそろ休みましょう”って言うほど一生懸命やってくれて。興味のあるなしもあったけど、声かけを具体的に小さな事から言えば“やろう”って思ってもらえると思いました。」

6) <行ったケアの意味がわかる>

これは実習での実践を振り返る過程において、自分が行ったケアの意味づけをするものであった。痴呆性高齢者の立場に立って相手のペースでケアを行うこと、今までの生き方をふまえた個別的な関わりが必要であること、尊敬の念を持って関わることなど、痴呆性高齢者へのケアの原則について、自分のケア体験からその重要性や意味について実感を伴った理解をすることであった。

「相手がどのような心情からそのような発言をしたのか、行動をとったのかをこちらがよく理解して、いったんその心情を受け入れて、場合によっては本人の望む方向へ言動を共にするなどして満足感を感じてもらうことが大事だって、つくづく思いました。」

「行動だけ見てたら、実際ちぐはぐなことだったり動きが遅くなったりするから、小さい子と一緒に

と言う人いるじゃないですか。でも、自分の何倍も生きてきた人っていうのをちゃんと考えたら、同じ行動見てもそんなこと言えない。こちらがちゃんとそういう意識持っていないとダメだと思うんですよ。」

IV. 考察

1. <実習前の思い>の特徴

受けもち高齢者が痴呆であると知った学生の中には、痴呆性高齢者を身近に感じられず、とまどいや不安を覚えたりしていた。実習前に講義で痴呆の病態や症状について学び、知識を一通り持ってはいても、学生にとって実際の痴呆性高齢者と関わるのは実習が初めての経験であり、このような反応を示すのも無理はない。鳴海⁷⁾らの研究でも、学生が痴呆性高齢者を受けもつ際に、受けもち高齢者とうまく関わるができるのか、拒否されるのではないかという不安を持つと報告されており、特別なことでないといえよう。また、今回の研究協力者の中には、痴呆だからといって特別に構えない学生もいた。これは先入観を持たずに相手を受けと止めようとするものであり、このようなニュートラルな学生の姿勢は高齢者を理解するうえで望ましい姿勢と思われる。

2. <拒否反応を示す>の特徴

このカテゴリーは感情レベルでの反応であり、1週目が拒否反応のピークとなっていた。基礎教育の段階である学生にとって、痴呆性高齢者の暴言や拒否に遭遇することは、かなりのショックであり、相手に対して嫌悪を感じ、拒否反応を示すことは容易に推察できる。しかし実習という枠組みで高齢者と接している学生は、それでも「関わらなければならない」「何かしなければならない」という思いを断ち切ることは難しく、大変なストレス状況に陥ることになる。その後実習が進むにつれ、スタッフや教員も高齢者に拒否されている場面を見たり、相手の特異的な言動に慣れてくるにつれて、暴言を浴びたり拒否されても、学生自身を否定しているのではなく、痴呆症状の一つであると納得することで、高齢者を少しずつ受容できるよ

うになっていった。実習の最後まで拒否反応が全くなくなったわけではないが、拒否感は徐々に緩和され、実習を継続することはできていた。

3. <関わりに困惑を感じる>の特徴

学生は痴呆性高齢者との関わりにおいて、<何者なのかわからない><どうしたらいいのかわからない><これでいいのかわからない>という困惑を感じていた。これは、痴呆性高齢者に関わる実習において、学生が困難を感じる状況を明らかにした宮本⁸⁾の研究結果とも一致しており、学生にとって、実際に痴呆性高齢者に関わることは、まず痴呆症状に驚き話をするにもためらいがあったと思われる。また、実習1週目は当然関わりも浅く、人間関係が形成されておらず、認知障害によりコミュニケーションもスムーズに行えないため、必要な情報も少なく、理解することは困難である。学生は痴呆性高齢者への関わりに関する原則は知っていても、目の前の痴呆性高齢者に対して、具体的にどう関わればいいのかわからず、また何らかのケアを行っても、相手の反応がなかったり、反応の意味がわからないことで、自分の関わりを評価できないという困惑があったと推察される。

4. <関わりの方を模索する>の特徴

学生は痴呆性高齢者の関わりに困惑を感じながらも、関わりの糸口を探ろうと、言動の意味を考え、アセスメントをしていた。痴呆症状の原因やその言動の意味を理解するために高齢者と行動を共にしたり、少し距離をおいて観察することなどを通して関わりの方を模索していた。諏訪⁹⁾は痴呆性高齢者を理解するうえで、どの場所、位置が居場所となっているのか、そこにどのようにいるのかというアセスメントの視点を持つことが重要であると述べている。つまり、ケアする側が勝手に痴呆性高齢者の意志を判断するのではなく、関わりの中から相手の意志を探索し続けることにより、その人に合ったケア方法を見いだし、相手の反応を多面的にとらえつつケアを評価することが重要なのである。<関わりの方を模索する>は、実践を通して痴呆性高齢者の状況をアセスメントし、自

分なりに相手の立場に立とうと努力しており、痴呆性高齢者の個別性を重視した関わりの方法を自ら見いだすために、非常に重要な段階であると考えている。

5. 《関わりのツボを見つける》の特徴

これは、《関わりに困惑する》《関わりの方法を模索する》というプロセスを経て、学生自身が実践を通して自ら気づいた受けもち高齢者への個別的なケアのポイントの発見であった。予測的に関わり、関わるタイミングや距離感をつかみ、意思疎通の方法を見いだすといった《関わりのツボを見つける》ことによって、痴呆性高齢者との関わりがスムーズになっていた。〈見通しが立つ〉ことは繰り返しの関わりの中で、パターンをつかみ予測ができることから、学生は焦ることなく相手のペースに合わせて関わることができ、よりよいケアへとつながっていったと思われる。〈関わるタイミング・距離感をつかむ〉では、自分の関わりだけでなく、スタッフの痴呆性高齢者への関わりを通して、関わるタイミングや声かけのヒントを得て、痴呆性高齢者の興味のあるもの、落ち着く場所などをさりげなく示してもらうことで、気づくことができていた。〈意思疎通の方法を発見する〉では、認知障害の程度を理解することにより、声かけの仕方やタイミングを工夫することで、意思疎通を図ることができ、相手にあったケア方法を体得できていた。《関わりのツボを見つける》前では、関わりに困難を感じながら模索をしている状態であるが、この後からケアの効果を実感し、ケアの意味づけが行われたことを考えると、実習のターニングポイントとして重要な段階と位置づけることができる。

6. 《行ったケアの意味がわかる》の特徴

これは実習の振り返りを通して、自分の関わりの効果を見だし、行ったケアが相手にとってどのようによかったのかを評価することで、ケアの意味を見いだすことであった。痴呆性高齢者の特徴から、ケアの効果を実時に明らかにすることは困難であり、スタッフや教員からの助言がないとケアの適否を判断するのは難しい。また、ケアの適否を判断するだけでなく、

知識として知っていたレベルであったケアの原則の重要性について、自分の実践とてらしあわせ、文献学習で検討することで理解が深まるとともに、痴呆性高齢者のとらえ方が広がり、自分自身を見つめ直すことにつながったと思われる。相手の立場に立って、相手にあったケアを提供することは、痴呆性高齢者をケアする上で重要であるが⁹⁾、学生は講義で学んだこれらのケアの原則について、実習を通して実感を伴った理解ができたと考えている。

7. 痴呆性高齢者理解を促進する実習指導のあり方

教員は学生が関わりに困惑を持つことは当然であると認識し、その思いを受け止める関わりが必要である。武井¹⁰⁾は、看護師が職業上ふさわしい感情をはずれた場合、感情規制や感情管理を行っており、本当の自分を見失う危険があると論述し、等身大の看護師の姿を認める必要性、重要性を指摘している。これは、学生にとっても同様のことが言えるであろう。関わることを拒否され、暴言を吐かれる体験は、学生にとって自分の存在が否定されたと感じる出来事であり、自信をなくしてトラウマとなる恐れがある。このような状況にさらされている学生に対して、教員と指導者は、学生の気持ちを抑圧せず、学生の感情に共感する態度を示す必要があると考える。

また、痴呆性高齢者を対象とする場合、その特徴を踏まえた指導のあり方が求められる。痴呆性高齢者のケアにおいては、問題志向型のケアではなく探索型のケアの必要性が言われており⁷⁾、これは、学生の実習においても同様であると考えている。つまり外側から見える問題点を同定してこれを改善しようとする看護ではなく、高齢者の立場に立って共に考えるエンパワメントの理念を基盤とした看護過程の考え方が痴呆性高齢者ケアに有効であるといえよう。学生は痴呆性高齢者の言動に当惑し、関わりに困難を感じながらも、自分自身の実践を通して相手を理解し、相手に合ったケア方法を模索することが重要であり、教員はこの様々とまどいと不安に満ちた実習プロセスにおいて、学生が模索することを承認し、理解の糸口や関わりのき

かけなど様々なヒントを与えながら、《関わり
のツボを見つける》ことをサポートすることが
重要である。湯浅¹¹⁾は痴呆性高齢者のもつ本質、
人間性、普遍性を看護者自身が実感できれば、
初心者でもあっても相手の世界のイメージがで
き、理解できると述べている。教員は、学生が
痴呆症状だけにとらわれることなく、高齢者の
これまでの人生や生き方に思いをはせ、人間性
を理解できるような示唆を与えることにより、
人間対人間の関わりができるようサポートする
ことが求められるであろう。

V. おわりに

本研究では学生の痴呆性高齢者を理解するプ
ロセスを分析した結果、《拒否反応を示す》《
関わりに困惑する》なかで、《関わりの方法を
模索する》ことにより、《関わり方のツボをみつ
ける》ことができ、これにより痴呆性高齢者の
個別性に合わせたケア方法を見いだしていた。
そして、実践を振り返ることで《行ったケアの
意味がわかる》こととなり、学生は実践的知識
として獲得していた。プロセスの中で《関わり
のツボを見つける》ことが実習のターニングポ
イントであり、これに至る模索の段階や、その
後の関わり方の意味づけが重要であることが示唆
された。しかし、今回は実習における痴呆性高
齢者の理解のみに焦点を当てたため、今後講義
と実習との関連を明らかにし、より高齢者理解
を促進する講義・実習のあり方についての検討
も課題であると考えられる。

参考文献

- 1) 松田千登勢他, 痴呆性高齢者の問題行動
の経験頻度とその認識について - 老人保
健施設の職員アンケートの調査による解

- 析 - 大阪府立看護大学紀要, 6 (1), 41-
49, 2000
- 2) 長畑多代他, 介護老人保健施設で働く看
護婦の痴呆性高齢者とその言動に対す
るとりえ方, 大阪府立看護大学紀要, 8 (1),
19-28, 2002
- 3) 宮本美佐他, 看護学生が痴呆性高齢者へ
の対応で困難を感じる状況の分析, 群馬
大学医学部保健学科紀要 22, 47-54, 2001
- 4) 岩波早苗他, 老人看護学における教育
方法の検討 - 老人看護学演習と実習との
関連について -, 和歌山県立医科大学看
護短期大学部紀要, 5, 55-61, 2002
- 5) 前畑夏子他, 老人看護実習による看護大
学生の老人のイメージの変化, 富山医科
薬科大学看護学会誌, 2, 103-116, 1999
- 6) 多田敏子, 老人看護学における臨地実習
による看護学生の高齢者に対する印象の
変化, 老年看護学 1 (1), 63-70, 1996
- 7) 鳴海喜代子他, 看護学生の受け持ち患者
との関係形成について - 老人看護学実習
における特徴 -, 看護展望 27 (9), 88-94,
2002
- 8) 諏訪さゆり他, 痴呆性高齢者の言動の意
味の分析 - その人らしさを尊重したケア
技術確立に向けて -, 東京女子医科大学
看護学部紀要, 4, 11-18, 2001
- 9) 長畑多代他, 介護老人保健施設で働く看
護師の痴呆症状に対するとりえ方と対
応, 老年看護学, 8 (1), 39-49, 2003
- 10) 武井麻子, 感情と看護 人とのかかわり
を職業とすることの意味 (第1版), 医
学書院, 東京, 2001
- 11) 湯浅美千代他, 老人痴呆患者の問題行動
に対する対処, 千葉大学看護学部紀要,
23, 39-45, 2001